

## 自由論題分科会 (21日、西キャンパス本館)

### 〔自由論題H〕社会文化

〈午後2〉24番

座長：千野拓政（早稲田大学）

#### H-1：楊麗君（シンガポール国立大学）：韓寒と中国の公共空間

韓寒：1982年生まれ。人気小説家、プロのロードレーサー。世界一のブログ王と称され、中国で年収の最も高い作家の1人である。アメリカの『タイム』誌で「2010年世界で最も影響力のある100人」の候補者に選ばれ、『アジア週刊』誌では「2009年度風雲人物」に選ばれたこともある。彼のブログは現状批判をテーマとし、理性的な観点と個性的な表現方法によって中国で人気になる一方、頻繁に意見対立者に批判され、大論争がしばしば引き起こされている。

本報告は、韓寒のブログの文章を分析対象として、現代中国政治社会における言論表現のあり方を検討することを目的とする。主に、以下の一連の問題の解明を課題とする。

韓寒の言論を現代中国政治社会の中でいかに位置づけるべきか。なぜ、韓寒の言論はこれほど人気になったのか。彼のファンたちはどのような社会階層に属し、いかなる理由で彼を好むようになったのか。彼の主要な反対者が誰で、なぜ彼を嫌っているのか。近年、中国政府は政治上の異見者に対して言論監視を強化しつつあるにもかかわらず、韓寒のブログが今日に至るまで生き残っている原因は何か。韓寒と劉曉波などの政治上の異見者との最大の相違点は何か。そして韓寒のブログの文章から、世論、政府、大衆の三者の関係をどのように理解すればよいのか。さらにはこの三者の関係は今後の中国政治社会の動向にどのような影響をあたえるのか。

これら一連の問題の解明は、現代中国社会の動きを理解するためにきわめて重要であるだろう。

#### H-2：牧陽一（埼玉大学）：艾未未とボディー・メディア、自由空間

艾未未は1979年星星画会に参加している。当時の活動は民主化運動と連帯し行動することであったが、その後の弾圧によって、メンバーは亡命を余儀なくされた。1985年八五美術運動では集体、群体と呼ばれるグループが中国全土に発生し、それぞれの理念に基づく芸術活動を展開したが、1989年六四天安門事件で、民主化運動は弾圧され、芸術表現の自由化もまた沈静させられた。1990年代「円明園芸術家村」「北京東村」の活動は群体の形成であると同時に芸術家村による「空間の獲得」が意図されていた。ニューヨークから戻った艾未未は「北京東村」に参加した。2000年代、黄鋭らの「798芸術区」艾未未らの「草場地」とアートエリアが形成される。空間の獲得と同時にインターネットメディアによる表現の拡大もなされた。08年艾未未らによる「身体媒体」展が開催される。艾未未は自らの身体をメディアとして公共的表現を獲得しようと意図したが、現在も政府の弾圧が続いている。

艾未未は「ネット社会は共産主義社会だ。私が望むのは私自身が「共産」されることだ。」と述べている通り、自らの考え、作品をブログやユーチューブで発表し、情報からプライバシーに至るまで公開してきた。「公開」「共産」という意味では政府の「隠蔽」「独占」と好対照をみせる。中国において政治至上主義の毛沢東時代から経済至上主義の鄧小平時代以降にかけて不変のものは、トップダウンの民意を反映させない「極権主義」システムであることは今日明らかであろう。中国共産党の「極権主義」システム下で、「公民」には逆転の可能性はなく経済的な成功への夢さえやがて潰えていくだろう。このシステムに対して、インターネットを活用し、自らの身体をメディアと化していく艾未未らの方法は、新た

なライフスタイルを公民に提供するとともに、公民が積極的に政治に参加していくことを促すのではないか。

### H-3：張広帥（北海道大学・院）：「郷村観光」による農民の自律性形成に関する研究

かつての中国では、観光は物質的には何も生み出さない「無用な行動」と捉えられていたが、改革開放政策以降は「外貨獲得による経済発展の手段」の1つと見做され、積極的に推進されるようになった。しかし、急速な経済成長を優先するあまり、経済効果を過度に追求したり、開発一辺倒の観光政策が実施されたことなどによって、自然環境の破壊や土地資源の濫用、地域固有の文化の消滅など、さまざまな問題が深刻化している。その一方で、1980年代後半から、「主に地域住民が主体となって農村の特徴を持つ地域で行われる、自然環境や農業、景観、文化などの地域資源を活用した」郷村観光が見られ始めた。

郷村観光の特徴の1つに、農民自身が小規模な事業を営んでいる点をあげることができる。マストურიズムの場合、行政や地域の有力者が資金を集め、大規模に観光事業を営むのに対し、地域の農民は単なる雇用者になることが多い。しかし、郷村観光の場合、自らが事業経営に参入することで、料理や施設、サービスなど、顧客ニーズに合わせて農民自身がさまざまな創意工夫を行うため、地域の特色をより多面的に捉えられる。

報告者は、「全国郷村観光モデル」である大連市金州区石河子街道東溝をとり上げ、経営理念や取組姿勢、地域社会に対する考え方などについて、郷村観光事業者に聞き取り調査を実施した。その結果、①個々の事業者を超え、村の所属である観光組織が地域全体の観光のレベルアップを図り、地域の固有資源を観光化し、そのマネジメントの役割を果たしていること、②地域の自然環境や文化など固有資源に対して、保全意識を醸成できることが明らかになった。したがって、郷村観光の経営に個々の事業者が関わるにとどまらず、地域単位の観光組織を形成して活動することによって、地域社会の自律性が形成される可能性があると考えられる。

### H-4：西本紫乃（広島大学・院）：Web.2.0時代の民間のソーシャル・ネットワークと相互扶助

#### ——広東省における公益活動の事例研究——

IT通信技術の普及によって、一般の人々もバーチャルな公共空間において日常的に情報発信できるようになった。とりわけ中国ではインターネット利用者は5億人にのぼり、2010年より急拡大したマイクロブログ（以下「微博」）の利用者はすでに3億人を超えている。中国におけるメディア研究でも、このような中国におけるインターネット及びSNSの普及は、利用者の「弱い紐帯」の広がりや「小グループ化」をもたらしていることが報告されている。

近年、中国国内では民間の個人や企業による貧困地区の児童の学習支援、病気の子供の医療費負担といった公益をおこなう多種多様なグループが生まれているが、こうした民間公益グループは、BBS、QQや微博といったSNSを積極的に利用し、救助を必要とする人についての情報交換、資金集めや会計報告といった活動の報告、相互に協力しあうネットワークの形成をおこなっている。またサービスを提供するインターネット企業およびテレビ、新聞といった既存のマスメディアが連携し、こうした公益活動を専用チャンネルでとりあげて報道するようにもなっている。こうした民間の公益活動を側面支援し、民間の活動をさらに活性化させる役割を担うという、SNSとマスメディアとの相互作用も頻繁にみられ

## 自由論題H

るようになってきている。

なかでも広東省は、かつてより民間活動が活発な地域であり、近年では微博の利用率が全国で最も高い地域でもある。本報告では、広東省におけるフィールド調査によって、公益活動に参加している個人が、どのように SNS を利用し、ネットワークを拡大し、これまでなかった新しい社会関係資本を生み出しているかを明らかにする。また、こうした活動公益にとりくんでいる活動家が、SNS を利用することでどのような社会関係資本を構築し、いかなるサポートを得ているのか、分析し考察をおこなう。

